

## 教育開発支援センター 2013年度 プロジェクト紹介

### 学生の教育力活用プロジェクト

学生の教育力活用プロジェクトでは、学生の教育力を活用した学習・教育支援のための体制を整備することを目的としています。本学では、学生が学習・教育効果を高めるために活動しています。教員の教授を支えるTA（ティーチングアシスタント）制度、初年次科目における学生の学びをサポート（ディスカッションのファシリテータ、プレゼンのロールモデル等）す

るLA（ラーニングアシスタント）制度、担任者が授業運営において行わねばならない軽微な用務の補助する授業支援SA（スチューデントアシスタント）制度があります。これらの制度を主軸に、研修を実施したり、その教材を開発するなどして、学生の教育力を活用した学習・教育支援のための体制整備をしています。

#### 1. TA制度の全学展開に伴う規程策定

関西大学ではこれまでTA制度を運用していたが、各学部によって運営されていたため全学的な規程を策定していなかった。そこで今年度は全学的にTA制度を展開するため、TA規程、ガイドラインを策定した。これにより全学的なTA制度の運営することがなされ、全学的なTA研修を実施する運びとなった。

#### 2. TAハンドブックの作成

TAハンドブックを作成した。TAハンドブックは、3部構成となっている。第1部では、TA制度の理念、具体的なTAとしての振る舞いについて記載している。第2部では、TAの業務内容の進行や業務内容に合わせて出てくる疑問や戸惑いに対する解決策としてTIPS集、TA通信を載せた。第3部では、諸規定・ガイドラインを提示した。

TIPS集に関しては、これまでのTA研修でTAから寄せられた課題を中心に取り上げ、それに対する解決策をTA有志2名とプロジェクトメンバーで検討、作成をした。

#### 3. TA研修の実施

全学部のTAを対象に、TA研修を実施している。今年度は、9月と3月に実施した。TA研修では、高等教育の現状とその課題についてミニレクチャーを行い、その後、TA同士による意見交換会を実施し、業務時の課題解決の方法を共有し合うようにしている。研修を通じて、関西大学のTA制度について理解し、TAとしての役割を認識する機会としている。

#### 4. TA通信の発行

2011年よりTA通信を発行しており、今年度は第9、10、11号を発行した。TA通信では、TAの活動内容、活動による効果、TAが活動を通して学んだこと等について記載している。これまでは、初年次教育、理工系演習、フィールドワーク、外国語等におけるTA通信が発行されている。

通信はホームページ

(<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/outline/ta05.html>) で公開している。

(教育推進部 岩崎千晶)

### アクティブ・ラーニングプロジェクト

教育開発支援センター（以下、CTL）では本学にアクティブ・ラーニングが浸透することを願って活動を展開しています。研究偏重主義への反省から大学本来の教育機能が見直されたのが初期のFDですが、アメリカでは1990年代後半より教育から学習（teachingからlearning／教師から学生）へとFD活動の重点をシフトさせました。CTLもこのパラダイムシフトを重要なことであると認識し、日々の教育実践のみならず、他に機会を見つけては学生の学習が主体的、活動的なものになるような知見や情報の提供・共有あるいは創出に尽力しています。平成21年度には大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムに『三者協働型アクティブ・ラーニングの展開－大学院生スタッフとともに進化する“How to Learn”への誘い－』が採択されました。プログラム終了後も同様の活動を続けています。以下に紹介するのは2012年度において実践したactive learningを学内に広く展開するための組織的な取り組みです。

2012年4月21日にFD Café（新任教員研修会）を開店（開催）しました。同caféではactive learningをクラスの中に展開・維持継続するために有用であると思われる各種メソッドやスキルを擬似的に体験してもらっています。グループワークをアクティブにするためにどのようなグルーピングや自己紹介が有効であるのか、グループでのダイアログを活性化するためにはどのような仕掛けが考えられるのか、ダイアログの内容を可視的にまとめるためにはどのようなツールがあるのか、そのようなことを踏まえて、ミラーリングを用いた自己紹介やWorld Café、mind mapなどを実際に体験していただきました。このcaféでの体験をご自身の授業に反映されている

教員もいるようです。

同年11月7日に第8回FDフォーラムを開催しました。講師に東京工芸大学芸術学部教授の大島武先生をお招きし、『コミュニケーション再考－分かりやすい「伝え方」－』という演目で講演していただきました。Active Learningを展開するためには、学生のみならず教師も授業に対してアクティブにならなければなりません。それを学生とのコミュニケーションに反映させるためにはどうしたらいいのか、コミュニケーションやプレゼンテーションなどのパフォーマンス研究をご専門とされ、ベスト・エデュケーター・オブ・ザ・イヤー最優秀賞を受賞された経験のある大島氏から学ぼうと考えて講演を依頼しました。CTL発行のNewsletterにも掲載したように、このフォーラムは好評を博しました。

同年10月5日を皮切りに、翌年1月11日の最終回まで、都合5回のランチョンセミナーを開催しました（詳細はNewsletterに掲載済み）。この新シリーズは「グループワークをはじめませんか？」というタイトルのもと、アクティブ・ラーニングを展開するために、PBL型授業では定番となっているグループワークに関する情報・知見・アイデアを提供し、共有することを目的としたものです。グループワークを実施するための準備作業やグループワークを開始してから留意すべきこと、その他、グループワークをより効果的なものにするための工夫、アイデアなどを提供者と参加者とで十分に共有することができました。こちらも毎回のセミナー終了後のアンケート結果から有用であるとの評価を頂きました。

(教育推進部 三浦真琴)

## ライティング支援プロジェクト

### 1) CTLライティング支援プロジェクトの設立

2010年度採択の大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム「文学士を実質化する〈学びの環境リンク〉—卒論ラボ・スケール・カードの有機的な連携による“気づき”を促す仕組み作り」が2011年度で打ち切りとなったのに伴い、文学部でのライティング支援の取組を全学に展開していくための母体として、2012年4月に「ライティング支援プロジェクト」を設立し、活動を開始した。これに伴い、文学部で運営されていた「卒論ラボ」を「ライティングラボ」と名称変更のうえ、10月より業務を移管した。

### 2) 大学間連携共同教育推進事業の採択

新たな活動予算を獲得するために、ライティング支援プロジェクトが中心となり、文部科学省大学間連携共同教育推進事業に、津田塾大学との連携取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」を申請し、採択された。ライティング支援プロジェクトは、関西大学側の事業の取組主体となり、2012年10月以降、新たな活動を展開した。

### 3) 2012年10月以降の主な活動

- ① **ライティングラボ**：ライティングラボにおけるライティング支援事業を従来どおり継続すると共に、新事業の趣旨に合致した支援内容の充実を図った。
  - 10月～3月まで、TAによる個人アドバイスを実施し、延べ163名が利用した。
  - 10月～1月まで、「文章表現ワンポイント講座」を計10回実施した。
  - 1月18日に、朝日新聞社との連携講演会「書きたいことは、読みたいことですか？」を開催した。
- ② **eポートフォリオ開発**：ライティング支援に特化した新しいeポートフォリオシステムの開発に向け、大規模な調査を実施した。
- ③ **教職員合同FD/SD研修会**：2012年11月29-30日および2013年3月17日に、津田塾大学と合同で教職員合同FD/SD研修会を実施した。
- ④ **シンポジウム**：2013年3月16日に関西大学にて津田塾大学との共同主催シンポジウム「ライティングセンター 日本の現状と課題」を実施した。

(文学部 中澤 務)

## プロジェクト「全学ICT活用推進会議」

2012年度に新規に立ち上がったプロジェクト「全学ICT活用推進会議」は、教育推進部の山本敏幸をリーダーとして、ITセンター副所長、学長補佐1名、学部所属の教員2名、学事局長、学術情報事務局次長、授業支援グループ長からなる組織である。本プロジェクトは、2010年度に「eラーニング/eポートフォリオ活用推進ワーキンググループ」が学長に提出した報告書を受けて、学長が本学におけるICTを活用した教育を推進するために提案した内容をもとに設立された。本プロジェクトのミッションは、日本の大学において、デファクト

スタンダードとなるような大規模大学におけるIT戦略、関大モデルを策定し、普及させることにある。

2010年度に「eラーニング/eポートフォリオ活用推進ワーキンググループ」が学長に提出した報告書に記載されている活動内容が多様、広範にわたるため、2012年度は本プロジェクトの責任領域と活動領域の設定に終始した。以下に、活動領域に含まれる大まかな項目を紹介する。

1. 対外的な本学の立場の明確化と対応策：  
大学eラーニング協議会、Sakai Foundation、JOCWなど。
2. 授業内で活用するインタラクティブ学習ツール：  
クリックカー、「S-maqs(エス・マックス)」、スマートフォン等
3. オンラインで補講(e-ラーニングによる補講運用の可能性)
4. 「授業支援システム」、「CEAS/Sakaiシステム」など、教育や学習を支援するシステムの運用支援体制と位置づけ
5. 講義配信システムの位置づけ

6. テレビ会議システムの活用方法
7. 教育・学習用eラーニングコンテンツ制作の方向性
8. 公開用コンテンツ(JOCW, iTunesU, iBooks Author)の本学での取り組みと方向性
9. 本学における公式なeポートフォリオシステムの位置づけ
10. 本プロジェクトの責任体制
11. 本プロジェクトの議決範囲

以上の項目について、過去の経緯と現状の問題点について、各メンバーが持っている情報を出し合い、可視化し、情報共有をおこなった。こういった活動を通して、本来本プロジェクトが責任をもって取り扱う

べき領域を明確化することができた。

(教育推進部 山本敏幸)

## プロジェクト「ICT活用授業の普及活動」

本プロジェクトは2011年度より始まったプロジェクトで、教育推進部教員2名と授業支援グループ職員4名からなる。プロジェクト期間は3年間で、本プロジェクトの使命は、これまでに整備・導入されたアクティブ・ラーニングを促進する教育支援用ICT機

器やシステム、及び、授業時間外学習を促進するためのインフラについて、全学レベルで啓蒙・普及をおこなうことである。これらの使命を実現するため、2012年度は次の活動を行ってきた。

### 本プロジェクトの活動内容

1. 授業支援用 ICT 機器やシステム等の普及のためのワークショップ・講習会の開催（新任教員研修会、ランチョンセミナー、FD カフェにて実施）
2. 授業支援用 ICT 機器各種の簡易利用マニュアルの作成と配布（授業支援システム・CEAS/Sakai システムのスターターマニュアルを作成）
3. 教材コンテンツ作成のためのアドバイス（尚文館マルチメディア作成スタッフとコンテンツについての勉強会開催、留学生別科 e ポートフォリオ用コンテンツ作成のアドバイス、留学生別科シンポジウムでテキストメッセージ付きクリッカーを活用した視聴者参加型のシンポジウムの実施）

2013年度は、コラボレーションコモンズのICTエリアを中心に、受講生をも対象に、アカデミックなICTリテラシー、スマートフォ

ンリテラシーの普及・啓蒙活動を行っていく。

（教育推進部 山本敏幸）

## 学習環境デザインプロジェクト

学習環境デザインプロジェクトは、2013年度から発足しました。このプロジェクトでは、学習・教育のための学習環境デザインの構築をしていくことを目的としております。具体的には、教室やその他学習施設における設備整備や運営、ならびに

教室に配置する機材や什器等の検討をし、学習環境のデザインを行います。

（教育推進部 岩崎千晶）

## 国立台湾大学 教育開発支援センター (CTLD) メンバー訪問

2013年4月23日に、本学の協定校でもある台湾の国立台湾大学 (NTU) から、本学の教育開発支援センター (CTL) とほぼ同じようなミッションを持つ機関、Center for Teaching and Learning Development (CTLD) からの視察団をお迎えしました。7名の、大部分がアメリカで学位をとられた精鋭の研究者のみなさんです。

双方のセンター長同士で事前に入念な打ち合わせをして、当方では極力関西大学のCTLの業務内容を理解いただけるよう準備しました。それに加えて、協定校であることを踏まえて、関西大学についてできるだけご理解いただけるよう、国際部とも連携してメニューを用意しました。

当日はまず、NTUのCTLDと本学のCTLの業務内容についての詳細な議論の場を設けました。その後、国際部のご協力を得て、本学に留学生として来ているNTUの学生を含めた懇談会、昼食会を経て、国際部長への表敬訪問をしていただきました。さらにその後、新たにできたコラボレーションコモンズの紹介を含む学内ミニ・ツアーをしていただき、その

後は場所を南千里の留学生別科に移し、その施設・教育内容等の視察もしていただきました。千里山キャンパスでは中国からの大学院留学生に通讯を依

頼し、スムーズなコミュニケーションを実現することができました。

帰国後、先方の引率責任者の教務長・莊榮輝先生から丁寧な礼状をいただき、先方にとって有意義な関西大学への訪問であったことを確信しました。学内各部署の先生方・事務の皆様のご協力に心から感謝している次第です。

（教育開発支援センター長 田中俊也）



国立台湾大学からの訪問団と留学生、国際部とCTLスタッフ